

夏目漱石とクラシック音楽

(第1回)

「楽」といふ美しい世界へ！

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

漱石は小説『それから』(二)のなかで、主人公の長井代助に、こんなことを言わせている。

楽という一種の美しい世界には丸で足を踏み込まないで死んで仕舞はなくつちやならない。僕から云わせると、是程憐れな無経験はないと思う。

代助の言う「楽」とは、音楽を意味する。生涯に一度もコンサートを体験しないまま死ぬとは、これほど憐れなことはないとは、漱石の本心にはかならない。

私は文豪の洋楽受容の研究を続けている。ここ数年は漱石のクラシック音楽体験を集中的に調べているが、彼の小説、小品、講演文、手紙やハガキ、日記や手帳に断片的に記された走り書きから実生活が見えてくる。漱石は洋楽に並々ならぬ関心を抱き、コンサート体験を重ねていた。

彼は生涯に少なくとも12回以上のコンサートへ行き、2回のオペレッタを観ている。最初は軽い好奇心からだったのかもしれない。ところが、いつしかコンサートに魅せられてしまった。音楽を聴いているとき、心が豊かになった。

音楽は感性を直撃する。だから、音楽嫌いの人は、楽器の音に神経を尖らせる。だから、聞こえると、落ち着かなくなると、苦情を言う。音大生

は下宿捜しに苦勞する。

漱石は娘が弾くピアノを、「ピン／＼ポン／＼中々好音を発し候」、と嬉しそうに知人に伝えている。手紙の用件とは、なんの関係もないのに、末尾にわざわざそのことを書き添えている。手紙を書いていたら、音が聞こえてきたのであろうか。

中村是公に誘われた満韓旅行では、大連のヤマトホテルに着くと、「隣の室で西洋人の女がしきりにピアノを弾じている」、と小宮豊隆にハガキを出している。ヤマトホテルは、欧米の一流ホテルに伍する格式だったので、ピアノが置いてあったのである。ちなみに、長女の筆子が音楽教習所に初めて行ったとき、付き添ったのが小宮であった。

※漱石の原文からの引用は、岩波文庫を使用しました。



1946年札幌生まれ。東京藝術大学音楽学部楽理科卒業、同大学院修士課程修了。専門は日本近代洋楽史(音楽学)。主な著書、編著に『夏目漱石とクラシック音楽』『森鷗外訳オペラ「オルフェウス」』『幸田延の滞欧日記』『ゼッキンゲンのトランペット吹き』など。翻訳書は多数。現在、山種美術館で、「美術×音楽」のユニークな企画をシリーズで手がけている。